

子育て支援ママパパアゴラ「らくちん子ども食」の取り組み -参加動機と満足に影響する要因-

木澤光子, 長屋郁子, 三輪聖子

岐阜女子大学家政学部生活科学専攻

(2014年1月31日受理)

Mama and Papa's Agora to Assist Child Rearing, An Approach of "Easy-to-Prepare Meals for Children" -Motivation for participation and factors affect the satisfaction-

KIZAWA Mitsuko, NAGAYA Ikuko, MIWA Satoko

Faculty of Economics, Gifu Women's University, 80

Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

(Received January 31, 2014)

1 はじめに

子ども・子育て関連3法（平成24年8月）が成立し、平成27年に施行されることになっている。子ども・子育て関連3法のポイントは、保育園・幼稚園・認定子ども園など乳幼児の保育・教育環境についての整備・統合への推進と放課後児童クラブなど地域の実情に応じた子ども支援の充実の2点である。本学子育て支援ママパパアゴラが対象とする就学前の子どもの約7割は、保育所・幼稚園を利用せずに家庭で養育されている。保護者、主には母親と未就園の子どもは、極めて密着した関係を構築することになる。親子の蜜月時期とも言える一方、子育てストレスを最も感

じる時期である。このような子育てストレスに対し、地域の子育て支援の充実化が図られている。

しかし、個別対応が必要だとされていても家庭の中にいる親子に手が届く支援は難しい。このような家庭という密室で過ごしている母子が参加したくなるような企画が準備されることは、児童虐待など子育てリスクを抱える保護者の虐待予防のために急務である。

本学で行っている子育て支援ママパパアゴラは2005年から開始し、今年で9年目となる。年々参加希望者が増え、参加を断らなければならない企画も多い。また以前は参加希望の少なかつた企画に参加希望者が増えるなど、ニーズの変化が見られる。実施内容、実

施方法などの修正を行い、最も求められる子育て支援をマニュアル化することで、誰もが若い保護者の支援に一役を担ってもらえると考える。地域の子育て支援の機能を高めるために、篤志家のみの支援にしてはならないと考える。

本学子育て支援ママパパアゴラの企画は4つあるが、そのうちの1つに「らくちん子ども食」がある。らくちん子ども食は、0歳から3歳までの乳幼児を育てている保護者を対象に、簡単な離乳食・子ども食づくりと、保護者同士の交流を目的に行っている。「らくちん子ども食」は人気のある企画で、定員8名だがいつも定員を超えて希望がある。

そこで本研究では、らくちん子ども食に参加する人の動機を明らかにし、参加の満足感に影響を与える要因について検討することを目的とする。

2 方法

ママパパアゴラ「らくちん子ども食」の実施日は、平成24年6月21日、7月19日、9月12日、10月10日、11月7日、12月12日、平成25年2月14日であり、計7回実施した。各回の時間は、いずれも13:30～15:00である。

対象者は、乳幼児（0歳～5、6歳）をもつ保護者41名である。各回の参加者は表1のとおりである。

表1 参加人数と対象の定義

日にち	参加人数	内容
平成24年 6月21日	6人	離乳期
平成24年 7月19日	8人	移行期
平成24年 9月12日	3人	離乳期
平成24年10月10日	5人	幼児期
平成24年11月 7日	7人	幼児期
平成24年12月12日	5人	移行期
平成25年 2月14日	7人	幼児期

らくちん子ども食の実施内容は、離乳食の段階により募集対象を限定した。離乳期は子どもの月・年齢0ヵ月から7、8ヶ月、移行期は7、8ヶ月から1歳半、幼児期は1歳から5、6歳までと定義した。

らくちん子ども食の講師は管理栄養士である。また、託児は元山県市保育園園長先生7名に毎回3名ずつローテーションで入ってもらった。本専攻4年生も元園長先生とともに子ども1人に対し1人以上の託児者がつくように配置した。

らくちん子ども食のコンセプトは、①レンジを使った簡単らくちん子ども食づくり、②旬と苦手な「野菜」を上手に摂る、である。

調理実習後、試食をしながらフリートークの時間を設け、話しの途切れたところを見計らい、講師がアンケートを実施した。

アンケートの内容は、子育て支援事業への参加のきっかけ・参加したその他の子育て支援など子育て支援利用の実態に関する質問5問（自由回答）、離乳食で困っていることについての質問1問（選択式）、今回のメニューで家庭に帰って作りたいものについての質問1問（選択式）、参加しての気持ちに関する質問（5件法）5問で構成した。

結果の処理は、SPSSにより、因子分析、カイ2乗検定を行った。

3 結果

1) 困り感にみる参加の動機

らくちん子ども食の定員は8名であるが、早い時期からの申し込みが可能のため、開催日を忘れるという参加希望者が多かった。また申し込み順に受け付けたことにより、全ての企画に早々に申し込み、後でキャンセルするというケースがあった。風邪等子どもの体調によりキャンセルがあるなど、当日参加す

表2 説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	2.246	37.432	37.432	2.246	37.432	37.432	1.954	32.409	32.409
2	1.342	22.36	59.792	1.342	22.36	59.792	1.643	27.383	59.792
3	0.891	14.844	74.636						
4	0.698	11.641	86.277						
5	0.489	8.145	94.422						
6	0.335	5.578	100						

る人数は回ごとに異なった。

離乳食を作るにあたり困っていることは何かを聞いた質問で、6項目の中から選択してもらった。回答結果について因子分析（主成分分析、Kaiserの正規化を伴うバリマックス法）を行い、2因子が抽出された（表2）。2因子の累積負荷量は59.79%である。

表3は回転後の成分行列であり、斜体太字の数字は0.5以上の高い相関の見られたものである。第1因子には「料理の作り方 (.821)」「離乳食の進め方や食べさせ方 (.645)」「食材や調味料 (.626)」「固さの目安や料理の形状 (.595)」に高い負荷量を示した。第2因子は、「1回の食事量 (.795)」「作るのが面倒 (.747)」「固さの目安や料理の形状 (.559)」に高い負荷量が見られる。

表3 回転後の成分行列

困っていること	成分	
	1	2
料理の作り方	<i>0.821</i>	-0.187
離乳食の進め方や食べさせ方	<i>0.645</i>	0.24
食材や調味料	<i>0.626</i>	0.324
固さの目安や料理の形状	<i>0.595</i>	<i>0.559</i>
1回の食事量	0.242	<i>0.795</i>
作るのが面倒	0.22	<i>-0.747</i>

第1因子は料理のノウハウを持っている人がさらに学びたいと思っている困り感であり、第2因子は離乳食を作ることが大変だと

感じ、基本的で簡単な調理を学びたいと考える人の困り感と考えられる。つまり第1因子は「料理向上」因子、第2因子は「簡単調理指向」因子と命名できる。

表4は参加満足度別にみた離乳食づくりの困り感である。困り感の項目ごとにPearsonのカイ2乗検定を行った結果、「参加満足度」と「離乳食の食べさせ方」の間に、カイ2乗値9.57、自由度3、1%水準で有意差が見られた。つまり、参加して「とてもよかった」と答えた人の中で「離乳食の進め方や食べさせ方」に困って参加している人は、困っていない参加者よりも「とても良かった」「まあまあ良かった」と答えた人の方が有意に多い。

2) 参加満足の理由

内容が参考になったか、子どもを託児に預けることができたりフレッシュしたか、について5件法で回答してもらい、参加して良かったかの回答とクロス集計を行った。参加して良かったかの質問に「どちらとも言えない」に回答した人はなく、これを除いて表にあらわした。その結果が表5、表6、表7、表8である。表5、表6は「参加満足度」と「内容が参考になった」のクロス表とカイ2乗検定の結果である。結果は、カイ2乗値12.605、自由度3、1%水準で有意である。したがって、参加して「とても良かった」と答えている人は、そうでない人に比べて「内容が参考になっ

た」と答える人が有意に多いことが認められた。

表7, 表8は「参加満足度」と「子どもを託児に預けることができリフレッシュした」のクロス表とカイ2乗検定の結果である。カイ2乗値20.731, 自由度9, 1%水準で有意であった。参加して良かったと答えている人は, 託児に預けることは良くなかったと答えている人よりも, 託児に預けて良かったと答える人の方が有意に多い。しかし, 子どもを託児に預けてリフレッシュしたかに対し「少しあてはまる」2人, 「どちらとも言えない」3人, 「あまりあてはまらない」1人と非常に数が少なく, 少ない数に検定結果が影響を受

けていると考えられる。そこでケースを要約し, 記述統計量を算出して箱ひげ図にあらわした(図1)。図1を見ると子どもを託児に預けてリフレッシュしたかの問いに「あてはまる」と答えた人のMは1.382, SDは0.817である。それに対し「少しあてはまる」と答えた人は, M2.000, SD1.414, 「どちらともいえない」はM2.333, SD1.155であった。これにより言えることは, 「あてはまる」と参加して良かったとほとんど感じていたが, リフレッシュしたとすぐ思えなかった人は, 平均値が高く, 子どもを預けたことにリフレッシュできたかどうかの回答にばらつきが見られた。

表4 参加満足感別にみた離乳食づくりの困り感

(人)

		参加満足感				合計		
		とても良かった	まあまあ良かった	あまり良くなかった	全く良くなかった			
困り感	離乳食の進め方や食べさせ方	はい	18	5	1	0	24	**
		いいえ	11	0	4	2	17	
		合計	29	5	5	2	41	
	1回の食事の量	はい	15	2	1	1	19	
		いいえ	14	3	4	1	22	
		合計	29	5	5	2	41	
	固さの目安や料理の形状	はい	19	2	1	1	23	
		いいえ	10	3	4	1	18	
		合計	29	5	5	2	41	
	食材や調味料の選び方	はい	16	4	2	1	23	
		いいえ	13	1	3	1	18	
		合計	29	5	5	2	41	
	料理の作り方	はい	15	3	3	1	22	
		いいえ	14	2	2	1	19	
		合計	29	5	5	2	41	
	作るのが面倒	はい	12	0	3	1	16	
		いいえ	17	5	2	1	16	
		合計	29	5	5	2	41	
	その他	はい	3	0	0	0	3	
		いいえ	26	5	5	2	38	
		合計	29	5	5	2	41	

** $p < 0.01$

表5 「参加満足度」と「内容が参考になった」のクロス表

(人)

		内容がとても参考になった		合計
		あてはまる	少しあてはまる	
参加してよかった	とても良かった	29	0	29
	まあまあ良かった	4	1	5
	あまり良くなかった	3	2	5
	全く良くなかった	1	1	2
	合計	37	4	41

表6 「参加満足度」と「内容が参考になった」カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearsonのカイ2乗	12.605	3	0.006
尤度比	11.708	3	0.008
線型と線型による連関	12.172	1	0
有効なケース数	41		

表7 「参加満足度」と「子どもを託児に預けることができてリフレッシュした」クロス表

(人)

		子どもを託児に預けることができてリフレッシュした				合計
		あてはまる	少しあてはまる	どちらとも言えない	あまりあてはまらない	
参加してよかった	とても良かった	26	1	1	0	28
	まあまあ良かった	5	0	0	0	5
	あまり良くなかった	1	1	2	1	5
	全く良くなかった	2	0	0	0	2
	合計	34	2	3	1	40

表8 「参加満足度」と「子どもを託児に預けることができてリフレッシュした」カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearsonのカイ2乗	20.781	9	0.014
尤度比	15.449	9	0.079
線型と線型による連関	6.384	1	0.012
有効なケース数	40		

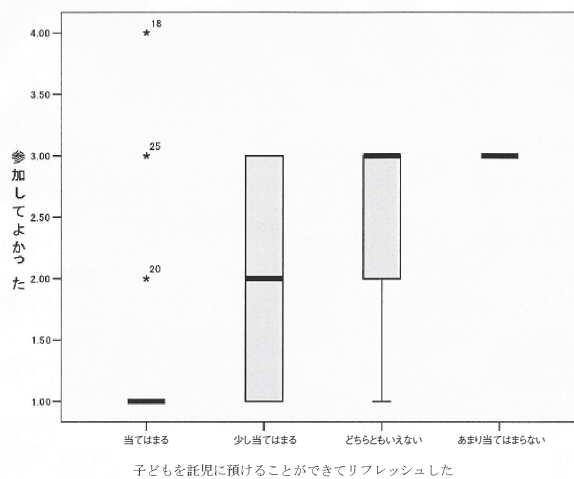


図1 託児を利用したリフレッシュ感別にみた参加満足度

4 考察

1) 困り感にみる参加の動機

本研究では、子育て支援「らくちん子ども食」に参加した保護者が、どのような困り感を動機として持って参加しているのか、参加満足・不満足に影響を与える要素を明らかにすることを目的に行った。参加者41名にアンケートを実施し、その結果の統計処理をした結果、次のことが明らかになった。

らくちん子ども食の参加者のニーズは、「料理向上」因子と「簡単調理指向」因子の2つである。前者は離乳食を作ることを楽しみ、さらに新しい知識や技術を求めて参加しようとしている。後者は離乳食づくりを得意とせず、離乳食づくりに困難を抱えていると考えられる。この因子は、できるだけ簡単に調理できることを指向し、前者のより高度な知識技術を求める因子とは料理の得手不得手という生活能力に差があると推察された。らくちん子ども食に参加する保護者には、調理に関する2つのレベルの異なる基本的構えを持ったグループが参加していることが明らかになった。

参加して良かったと満足感を示した人は、そうでない人に比べて、離乳食の進め方や食べさせ方に困って参加している。この項目は第1因子であり、すなわち、料理の腕をあげたいと思って参加している人が、満足していることが伺われる。また満足していない人は、本項目に困った感を持っていないことが明らかになった。つまり、技術向上ではなく、離乳食を作ること自体が負担になっていることが考えられる。

「離乳食の進め方や食べさせ方」に困っていると回答した人の本講座に参加した理由(自由記述)を見ると、「料理がマンネリ化しているの」「レパートリーを増やそうとして」など、離乳食を順調に進めてはいるものの、さらなる知識やアイデアを求めていることがわかった。

本講座の参加者はリピーターとなる率が高く、毎回異なるメニューが実習できる企画であることも動機の1つと考えられる。

2) 参加満足の理由

らくちん子ども食は、参加者の満足感がとても高い企画である。そのような良い反響で

もわずかな減点にも注目することで、乳幼児を育てる保護者のニーズに応えられる企画へと質を高めていくことができる。

参加して良かったと感じた人は「内容が参考になった」「子どもを託児に預けることができリフレッシュできた」と感じていることが明らかになった。

一方、少数だが参加してあまり良くなかったと減点回答をしている人の中で、子どもを託児に預けることができリフレッシュできたかの質問に「あまりあてはまらない」と回答している人がある。託児に子どもを預けることが不安な保護者の場合、子どもの泣く声が気になって、調理に集中することができないことがあると考えられた。

また、不満足感に与える要素として子どもを託児に預けた時の認識が影響を与える可能性があるが、今回明らかにすることはできなかった。

また減点のない人たちは満足感が一様で、減点のある参加者の場合、参加満足度の度合いにばらつきが見られる。これは個人の持つ負因、例えばコミュニケーション能力、性格、不安への感知度などが影響を与えていると考えられる。

以上をまとめるとらくちん子ども食の参加動機は図2のようになる。

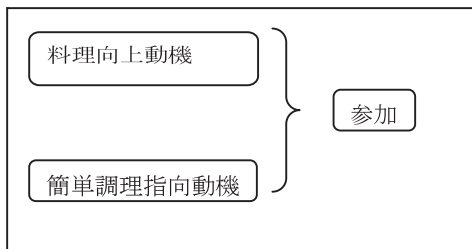


図2 らくちん子ども食の参加動機

参加して良かった人は、「内容が参考になった」ことに満足しており、子ども食づくりの新しい知識や技術の習得の機会となったと考えられる。これは小グループによる実習のため、レシピや食材、調理法に関する学びだけでなく、離乳食の進めかたなど子ども食に関する様々な悩みをその場で発し、講師が即回答するという環境があることが内容に満足する要因の1つであろう。

また子どもと離れて調理することに罪悪感や不安感がなく、肯定的にとらえている。つまり目的を持って参加し、今後の子ども食づくりに参考になる学びがあること、子どもと離れる時間となることが満足感につながったと考えられる。すなわち、今日の母親が求める自分の時間を生き生きと過ごすことを保障する時間となったのではないだろうか。

しかし、今後、子どもと離れることに不安を感じる保護者の発見と対応を検討する必要があることが示唆された。ママパパアゴラの展開方法や内容についてさらに研究を進め、とりわけ虐待リスクのある人が気楽に参加できる企画を提案したい。

引用・参考文献

- 1) 木澤光子 三輪聖子 梶浦恭子 馬淵知子, 子育て支援「ママパパのたからもの」の取り組み, 岐阜女子大学紀要, 第41号, 2012, pp. 151-158
- 2) 木澤光子 三輪聖子, 子育て支援「ママパパアゴラ」の効果的な展開—ベビーマッサージの取り組み—, 岐阜女子大学紀要, 第42号, 2013, pp. 121-128
- 3) 宮本純子, 乳幼児をもつ母親の自己決定感が時間的展望と育児不安に及ぼす影響, 心理学研究, 第84巻第2号, pp.176-182
- 4) <https://wwwb.cao.go.jp/shoushi/shinseido/index.html> 子ども・子育て支援新制度 内閣府・文部科学省・厚生労働省